

# 丸善の洋品と身体近代化

川野 佐江子

世界で欧州列強が帝国主義による覇権を争っている中、欧米の文物をいち早く摂取して自国の独立を維持させるという理念をもって一八六九（明二）年丸善は創業した。したがって、当初から洋書と書はもちろん、洋品服飾品、文具筆記具、生活雑貨、酒類、食品などありとあらゆる商品を取り扱ってきた。こうした丸善創業当時の欧米文化の摂取とは、すなわちヨーロッパで市民革命と産業革命を経て確立された「近代」なるものを受け入れることにほかならない。それを踏まえ本稿では、身体近代化について丸善のとりわけ洋品と関連させて、三つの視点から考えてみたい。

## 身体近代化

洋装化の施策として有名なのは、一八七一（明四）年太政官布告第三九九号「散髪制服略服脱刀共可為勝手事 但礼服ノ節ハ帯刀可致事」いわゆる散髪脱刀令と、翌一八七二（明五）年太政官布告第三三九九号「大礼服及通常礼服ヲ定メ衣冠ヲ祭服ト為ス等ノ件」だろう。また面白いところで、華族（男女とも）に対するお歯黒と眉そりの禁止令（一八七〇）（明三年太政官令布告第八八号）も挙げられる。これらの政令によつ

て、身体は封建社会の装い制度から自由になり、新時代の着装モデルは欧州由来の服装制度であることが布告された。このように洋装が、個人の身体を解放すると同時にその身体を近代的規範に取り込むという矛盾を孕みながら制度化した頃、丸善ではすでに東京日本橋に洋品雑貨卸を扱う唐物店を出店（一八七一／明四年）させ、その店内に洋服の仕立店（一八七一／明五年）を置き、人びとの洋装化の動きにこたえていた。また洋品小売店として菱屋を設立し（一八八四／明七年）、主に紳士物を取り扱う頃には、帝国大学で制服が規定（一八八六／明一九年）され、街中でも洋服の普及がみられたという。さてその頃丸善洋品で特に盛況だったのが舶来の帽子だったことが『丸善百年史』に記されている。なぜ帽子だったのか。

それはつまり、帽子が近代的装いの象徴として、身体においてもっとも重要かつもっとも目立つ頭部に位置したからではないだろうか。文明的かつ権威的な装いとして「自己」ともに視覚に訴えることのできた帽子の効力、たとえ和装であっても帽子さえ被れば新時代を表象でき、着脱も簡単だ。

髪型や服装が身分を表さなくなった時、装いの自由化とは、自分は誰なのかの表明を求められることであり、その表明に

自己責任を負わせる社会になったことを意味する。近代とは、「個人（わたし）」を迫る時代だからだ。そんな中、他者である西洋文化をすんなり受け入れ、和洋折衷の「自分たちらしい」装いを誕生させた当時の人びとには、逞しさと凶太さを感じざるをえない。洋装化は、自分をどう見せるのか、という問いをその後の私たちに突きつけたと言えるだろう。

### 身体技法の近代化

洋装化は、単に外見のことだけでなく身体技法の問題も含む。たとえば欧州式軍事訓練から持ち込まれた「行進」は、日本伝統の舞踊や武術の「摺り足」「なんば」と異なり、腕を前後に振り、その推進力を利用して腰を中心に膝を伸ばして踵から着地し、地面を蹴って前進する。洋服文化の私たちには当然のこの歩行方法は学校体育の訓練で得られた身体技法であり、逆に和服や草履では難しい。「近代」とは理性で肉体を凌駕する時代であり、近代的身体技法の修得はその具現化でもある。これは、マナーや躰に通底し現代でも「理性的文明人の証」とされる。丸善でも成人から子ども用まで様々な靴が販売され、これは人びとの歩き方に少なからず影響を与えただろうし、同様に洋食器類の輸入は、新たな食習慣や作法の普及に関与しただろう。いつの間にか私たちの身体は近代的制度の下にその動きを統制されてきたと言える。

### 衛生観念と近代的身体観

丸善は常に石鹸を取り扱ってきた。平成になってからも自社ブランド「アテナ石鹸」が好評だったのを筆者も覚えていいる。ところで創業時の一九世紀後半は、パリが衛生都市として改造されるなど、世界的に公衆衛生が国策として国民個人の衛生・健康・生命に関与し始めた時代であった。つまり個人の身体が国家の管理下に置かれていくことになったのである。と同時に健康・清潔は美德とされ、個人の人格を判断する基準にもなっていく。そうした社会風潮の中で、丸善では石鹸、歯磨き、口中香錠、香水、化粧品、安全剃刀など、衛生に関する商品を提供し続けた。丸善の商品は安くなかったが、むしろお金をかけて自らの身体をケアすることは、近代国家における市民のステータスだと言える。関連して、健康的・閑暇的消費の象徴として、平成の丸善洋品でもゴルフ用品が盛況だったことは非常に興味深い。健康と結びついて積極的に手をかけられた身体は、管理された身体として近代社会で称賛されるのである。

以上、丸善の洋品に触れながら身体近代化について述べてみた。服装、身体技法、清潔・健康は、身体の上で個人と社会を交錯させる装置だ。丸善はその装置を提供し、身体近代化を支えたことになる。これからの医療、AR、AIなどの技術革新は生身の身体とどう関わるのか、令和の丸善の身体はどこに向かうのか、引き続き着目したい。